

国立仙台病院に於ける子宮頸管長と妊娠予後との関係

ハイリスク児の予防に関する研究

田中 憲一
高橋 克幸、明城 光三

要 約:

- 1)国立仙台病院で分娩した妊婦のうち、妊娠に12週以前より通院していた例では早産率は4.4%であったが、臨床的に問題となる妊娠34週未満の早産は0.7%であった。
- 2)妊娠初期(8~12週)と中期(18週~22週)での子宮頸管長は切迫早産のため入院を必要とした群(入院群)と、必要としなかった非入院群を比較した場合、中期で入院群が有意に短く、又初期より中期への頸管長減少が有意に大であった。
- 3)従って妊娠初期と中期に頸管長を測定することにより切迫早産を予知し早産を減少させる可能性が示唆された。

超音波診断 子宮頸管長 早産

緒 言:超音波断層法による子宮頸管の状態の観察は、特に近年経膈超音波法が広く使われるようになり頸管無力症の診断に有用であることがよく知られている。しかし頸管の超音波所見と妊娠の予後との関係についての前方視的研究はほとんど行われていないのが現状である。

研究方法:平成5年12月より平成6年7月までに当院産婦人科外来を受診した妊婦より抽出した63例に対し、(1)妊娠8~12週(2)妊娠18~22週の2回経膈超音波断層法による頸管長の測定を行い、同時に子宮頸管培養も行った。

研究成績:平成6年の当院産婦人科での妊娠22週以降の分娩数は842例であり、そのうち475例が妊娠12週以前より当科を受診しその後妊婦検診、分娩を行った“booked patient”であった。この475例が今回の検討の母集団となる。早産は21例4.4%であったが、早産でも臨床的に問題が少ないと思われる妊娠34週以降が18例と大部分を占めていた。妊娠22週と32週に1例ずつ認められた早期の早産例は前期破水の結果早産となった症例であった。

さて頸管長を前方視的に測定した63例については1例が22週、3例が36週で出産、他は全て正常産であった。22週の一例は、21週で破水し、子宮内感染を発生した例で、この症例を除外すると36週未満の分娩はない。今回の検討は切迫早産のため入院治療を必要とした8例と、入院治療を行わなかった54例とを比較検討した。超音波断層法で内子宮口が開大していた例はなく、内子宮口と子宮頸管の先端までの直線距離を測定した。表1に示すように、8~12週の頸管長では両群に有意差は見られなかったが、18~22週では入院群が有意に小さく($p=0.036$)、初期から中期にかけての頸管長の減少も有意に入院群が小であった($p=0.02$)。頸管培養陽性率、分娩週数、出生体重に有意差はなかった。

考 察:当院では切迫早産の症状を示す妊婦には可能な限り入院治療を行う方針としている。妊娠12週以前より受診している“booked patient”では早産率が4.4%だが臨床的に問題となる妊娠34週未満の早産は0.7%と少ない。今回の検討では、8~12週にエントリーした前方視的研究なので、この“booked patient”より抽出された症例が検討対象となった。さてこの63例では22週の1例を除き全て36週以降の分娩であった。切迫早産のため入院治療を要した症例は放置すれば早産となった可能性のある症例と考えられるが、この入院群の頸管長は妊娠初期には非入院群と比較し差が見られなかったが、妊娠中期になると有意に減少した。このことより妊娠中期に頸管長を測定し、特に初期との比較を行うことにより、将来切迫早産として治療を行う必要な可能性が高い群をハイリスク群と認識し、早産を減少させる可能性が示唆された。

	8-12週の頸管長 (mm)	18-22週の頸管長 (mm) *	頸管長の減少 (mm) *	18-22週の頸管培養陽性率 (%)	分娩週数 (週)	出生体重 (g)
切迫早産のための入院治療あり (n=8)	42.4 ± 6.4	36.0 ± 5.5	6.4 ± 7.7	63%	38.1 ± 1.3	2980 ± 380
切迫早産のための入院治療なし (n=54)	40.5 ± 6.4	41.5 ± 6.8	-0.9 ± 8.0	50%	39.1 ± 1.3	3120 ± 390

表1 (* $p < 0.05$)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1)国立仙台病院で分娩した妊婦のうち、妊娠に12週以前より通院していた例では早産率は4.4%であったが、臨床的に問題となる妊娠34週未満の早産は0.7%であった。

2)妊娠初期(8~12週)と中期(18週~22週)での子宮頸管長は切迫早産のため入院を必要とした群(入院群)と、必要としなかった非入院群を比較した場合、中期で入院群が有意に短く、又初期より中期への頸管長減少が有意に大であった。

3)従って妊娠初期と中期に頸管長を測定することにより切迫早産を予知し早産を減少させる可能性が示唆された。